

《村上 靖彦》氏

ケアとは何か

### ケアとは何か

私は看護師さんへの聞き取りを中心に研究を進めてきました。それは、看護師さんが持つコミュニケーションに対するスキルや情熱への驚きと、逆境、とりわけ人の死に関わる場面で患者さんと家族とを繋いでいく役割を果たされていることに引き付けられたからです。そんな看護師さんたちから教わってきたことを幾つかの事例をもとにお話したいと思います。

### コミュニケーションを取る努力とスキル

ケアというのは患者さんと家族とのコミュニケーションから成り立っています。とりわけ意識が薄れていく患者さんや重い障害のためにコミュニケーションが容易でない患者さんとコンタクトを取る努力を看護師さんは行っています。

まずALSという筋肉が衰え呼吸が困難になり最終的には体中の筋肉が動かさず、まぶたの動きや眼球の動きでしかコミュニケーションが取れなくなっていく難病の患者さんの事例です。

その方って眼球がもう動かない。動きがかなり落ちてきていて、で、まぶたも随意的にパッと開けられる状態では今なくなっているので、少しだけ、こう上まぶたを介護者が開けてあげて黒目が見える程度に開けて、で、文字盤に「あかさなた」、「はまやらわ」を打って、二択をまず提示して、「あかさたな」だったら、こういうなんか、こういう透明の文字盤みたいなものに、こう丸とばつをこう、でくって、で、「丸だったら、上に黒目を上げてください。で、ばつだったら、おっかけないでください」っていうやり方で、目が黒目がふーって上を向いたら、イエスっていうふうにするんですね。でもそれも、それに合わせて必ずしも上がるとは限らないですね。だから何度も、「あかさたな」「はまやらわ」をもう一回聞きますね。」「うーん、分かんない。もう一回聞きますね」っていうような感じで。[…]

だから、多分、本当にあの、10文字ぐらい読み取るのに、多分3時間とかかかりますね。

ALSの患者さんは体は動かさなくても頭はクリアなので、独りぼっちにしないために、まぶたや眼球の動きから読み取ろうとする努力とスキルは非常に大事なものになってきます。例えば読み取れなくても読み取ろうとするその意志こそが、患者さんがこの世に存在しているという証拠になるわけです。

もう一つ、コミュニケーションの重要性を示す事例を紹介します。ある助産師さんが若い妊婦さんに病院の受付で怒鳴られるという場面です。

もうすごいヤンキーの子がおってね。フフ、で、私を呼ぶわけ。[…]私のことは「ひろえ」って言わんと「おかつぱ！」って言うんで。でもその子にしたら、『初めて人を呼んだな』っていうような。

その助産師さんが言うには、外来の奥の方で別の仕事をしていたが、その怒鳴り声を聞いて“何か困っ

たからここに来た”ことを直ぐに感じたそうです。普通に聞けば単なる怒鳴り声でしたが、実はSOSだと聞き取る力をその助産師さんは持っているのです。これもコミュニケーションスキルの大きな要素ではないかと思えます。

### 小さな願い事を叶える

看護師さんは時に患者さんたちの持っている願い事を支えながら患者さんをケアすることもあります。

人生会議という厚生労働省のポスターがありますが、当初そのポスターは「どう治療を受けたいか家族と医療者と話し合っておこう」という趣旨のことが書かれていました。しかし、厚労省のメンバーだった紅谷先生は、「病気の話ばかりしないでいい、何が好きか、何が大切なのかを家族といっばい話そう」というメッセージに変えたわけです。紅谷先生のある患者さんは、末期がんで治療の術はないという状態でしたが、亡くなる前日にお嬢さんのソフトボールの試合を見ることができました。この患者さんにとってはお嬢さんの姿を見届けることがすごく大切だったわけです。

続いての場面は難病のお子さんの事例です。

裕子ちゃんは小学3年のときに神経難病にかかり、胃ろうを造設し禁食になりましたが、食べたいと訴える彼女にお母さんは「元気になったら…」とごまかし続けました。みるみるやせ細り、そしてとうとう余命一か月。お母さんは何とか口から食べさせられないかと主治医に懇願し、プリンを食べさせることになりました。そのプリンはお母さんが作ったもので裕子ちゃんの大好物でした。

一口め、そして二口めもどのお腹にゆっくり落ちていくのが見えました。すぐには嚥下反射は起きません。誤嚥したのではと危惧した瞬間、彼女のどろろと反応したのです。様子をじっと見守っていたお母さんは「食べた食べた、裕子もありがとうと言っている」と号泣しました。

この時、それまで無反応、無表情だった裕子ちゃんの頬にも大粒の涙が大量に流れていたのです。裕子ちゃんは本当に食べたかったのです。

小さな願い事ですが、それが叶ったとき、裕子ちゃんは生気を取り戻したのです。この手作りプリンの中にはお母さんと裕子ちゃんの物語が詰まっており、食べたいという願い事が叶うことでお母さんとの関係が再構築されたのです。

次は、映画化もされた『こんな夜更けにバナナかよ』の一場面です。気管切開をして人工呼吸器をつけた利用者さんがタバコを吸いたいという要望に対し、彼の介助者はそれを断るという場面があります。一見すると単にワガママを言っているだけのようですが、人の生活はワガママをいかに実現するかでもあり、タバコは体によくないという医療の規則が必ずしも正しいわけでもありません。この場合は、介助者さんが利用者さんの願い事と医療の規則をどのように調整していくのが大切なのです。

同様の場面は、私自身のインタビューでもあります。糖尿病を患い人工透析を避けられない患者さんを前にした場面ですが、お医者さんからは糖分や塩分を制限しなければならないと言われていた中で甘いものを食べてしまう患者さんに対し、担当の看護師さんは、それが患者さんの普通の生活であり、人って皆そういうものだと言いながら患者さんとどう付き合っていくか模索されていました。

これらのことは、実は患者さんが生きていくことそのものを支えていくケアでもあるのです。

## 死や逆境に向き合う

看護師さんのケアには患者さんが亡くなっていく場面に関わることもあります。看取りの場面では答えがないことがよくあります。そういう場合、ケアする看護師さんが患者さんと同じ立場に立つことが重要になってきます。

ある看護師さんは、末期がんの 30 代の女性の方から「私もうすぐ死ぬんだよね」って聞かれたそうです。その時に知らないとも言えないし、どう声をかけたらいいのかわからず黙っていると、「そうだということなんだね」と言われて。それでも黙るしかなかったとおっしゃいました。

この場面ではこの看護師さんが、たとえ答えることが出来なくとも、その問いかけを受け止めるということ自体が大事になっています。受け止める人が目の前にいることそのものが患者さんにとってのケアになっているのです。

一方で、看護師さんの声かけが死を受け入れていくことに繋がる事例もあります。

くも膜下出血でもう脳死に近い状態の方がおられて、その方の奥さんがあまりに寂しそうだったので声をかけたそうです。それから 2 か月奥さんと関わりをもつのですが、その間、旦那さんとの関係とか、旦那さんがどういう人だったとか、そんな話をいっぱい聞いたそうです。そしてその上で奥さんが旦那さんの人工心臓を止め、旦那さんが亡くなるのですが、その場面について看護師さんは、語りを続けられました。

やっぱり旦那さんがいないと生きていけないと奥さんが言われるので、旦那さんを囲んで話をする中で、「旦那さんなら今何て言うと思う？」と尋ねたそうです。そうすると「しっかりするように、と多分言うと思う」と、旦那さんがなくなった後のような言葉を発せられたので、少し受け入れの準備が出来てきたかなと思い、たくさんの管がついている旦那さんの体の下に、手を入れてぎゅっと抱きしめてもらったところ、患者さんにふっと笑顔が見えたのだとおっしゃいました。

この看護師さんは、患者さんの枕元で奥さんと旦那さんとの話をする事で、過去の患者さんとの関係を呼び起こさせ、旦那さんとの良い思い出を振り返らせています。そして話すことができたなら何て言うと思うかと、想像の中で奥さんと旦那さんの関係を繋ぎ直そうと試み、会話を成立させています。また奥さんに旦那さんを抱きしめることができることを伝え促していますが、これは想像ではなくリアルな体の接触という方法で旦那さんと奥さんとのコミュニケーションを復活させている、そういうケアになっているのですね。

過去の思い出、想像の中での会話、体の接触、この三つのチャンネルで亡くなっていく患者さんと家族を繋いで看取り支えているのです。

救命救急の病院の中では突然患者さんが死を迎えることが多く、家族はそれを受け入れることが難しい場面で看護師さんがこうしてケアを実践されているという事例でした。

## おわりに

私が出会った看護師さんたちの実践場面に共通するのは、患者さんの“生を肯定する”ことなのです。家族や周りの方々に向き合い、日々ケアをされている多くの方々にも何らかの良き参考になれば幸いです。